



やらまいか

クラブテーマ：原点回帰

会長／金田 征宏 幹事／大島 嗣雄 会報委員会／中村 嘉輝・中西 弘徳 例会／毎週火曜日 12:30 豊川商工会議所
事務局／豊川市豊川町辺通 44 豊川商工会議所会館内 TEL0533-86-2535 Fax0533-86-8889 HP／<http://toyokawahoi.tank.jp>

本年度第16回 通算1453回 平成28年11月1日(火)	出席報告	会員総数	出席者数	出席率	10/18修正出席率
		62名	31名	55.4%	87.7%

ゲスト：人形の吉徳 顧問 青木 勝氏 ビジター：(なし)

★会長あいさつ

金田 征宏 会長



こんにちは。本日は、人形の吉徳の青木様を迎えて、日米人形交流についてお話を頂きました。12月3日は、

名古屋中京大学でシンポジウムが行われます。その前に、青木さんよりお話を伺います。よろしくお祈りします。

先週は秋の行楽で、伊勢志摩へ行ってきました。浅野親睦委員長、中西副委員長には大変にお世話になりました。ありがとうございました。初日は雨になり、少し予定を変更しました。翌日はとても良いお天気になり、ゴルフ組と観光組に分かれて出かけました。観光組は、伊勢神宮の特別参拝をさせて頂きました。伊勢神宮の神職の方と説明と神楽殿での神楽を見せて頂きました。なかなか体験できない事をして頂き、鈴木忍会員には大変にお世話になりました。

10月22、23日は、地区の行事のWFFが開催されました。伊藤副幹事は大変お疲れ様でした。来年度もWFFが開催されると思いますので、皆さんもご参加頂ければと思います。

★幹事報告

大島 嗣雄 幹事

例会臨時変更のお知らせ
地区大会について

★ロータリー財団担当例会

委員長あいさつ

大木 悦子 委員長



こんにちは。今日はロータリー財団委員会担当例会です。今年のロータリー財団委員会は、昨年を引き続き、ミス愛知を里帰りさせる会の活動支援を行っています。

昭和2年には、日米両国の友好のために、アメリカから1万2千体を越える青い目の人形が贈られ、その返礼として全国の子どもの募金をもとに58体の市松人形をアメリカに送りました。長い年月による老朽化は否めず、昭和49年以降、修復を求めて日本への里帰りが続いています。その修復を手掛けてみえるのが、今日の講師の吉徳の青木様です。親子3代にわたる答礼人を修復された社長室に秘書として関わってみえます。今日は、長い歴史の一端をお聞きしたいと思います。よろしくお祈りします。

講師の紹介

小野 喜明 パスト会長



講師のご紹介をさせていただきます。答礼人形を里帰りさせる会の顧問として、ご参加を頂いております青木勝さんです。東京

の浅草橋にあります吉徳という老舗の日本人

形店の顧問をされています。全国各地の答礼人形に関わっていらっしゃる方です。青い目の人形と答礼人形に関しましては、非常に造詣が深く、私たちの活動についても大変ご協力を頂いております。来年に向けての展示会に向けた企画も色々ご提案を頂いております。

今日は、12月3日に中京大学においてのシンポジウムで、青木さんにもお話を頂く予定となっております。そのPRを兼ねて、卓話をして頂きます。よろしくお願ひします。

卓話「日米親善人形交流について」

人形の吉徳 青木 勝氏



私は、東京の浅草橋にあります人形の吉徳の顧問の青木勝と申します。

来年は、1927年(昭和

2年)の日米親善人形交流から、ちょうど90年を迎えます。その節目の年に、人形交流90周年記念「青い目の人形と答礼人形・ミス愛知里帰り展」が開催されることは、私たち日米両国の友情人形の関係者一同も、興味深く、注目しているところです。

私は、今まで数多くの答礼人形の修復里帰りのご協力をしてきましたが、里帰りさせる方の事務局連絡会議の第1回から参加させて頂くのは、初めてのことです。ですから、非常に嬉しいですし、大変興奮しています。

また、「30周年事業」として、このたびの里帰りに対し、日頃からご協力頂いていることをお聞きしておりましたので、感謝の意を表して、力不足ではありますが、本日お話をさせて頂きます。

吉徳の社長も3代にわたり、東京浅草ロータリークラブのロータリアンです。10代目の社長、山田徳兵衛は、1964年の初代会長を務めました。私も11代目のもとで、社長の秘書として、お手伝いをさせて頂きました。まさか本日の様に、ロータリークラブで自分がお話をするとは想像もしていませんでした。どうぞ、よろしくお願ひします。

1927年(昭和2年)春、日米両国の友好・

親善を願ひ人々の尽力で、アメリカから12,739体の「青い目の人形」が日本に贈られてきました。その後、全国各地の幼稚園や小学校に配布されて、華やかな歓迎会が行われ、社会的に大きく盛り上がりを見せました。

そして、その秋、日本から返礼として、大型の市松人形の「答礼人形」を58体アメリカに送りました。

その後、日米間の不幸な戦争によって、ほとんど失われた「青い目の人形」の物語は、今も多くの人々により語り継がれています。現在、青い目の人形は337体が確認されています。

一方、日本からアメリカに贈られた答礼人形は、47体の存在が確認されています。その保存状態は様々ですが、いずれも年月による痛みなどがあり、その修復のために日本への里帰りが続いています。

吉徳は、1711年(江戸時代中期の正徳元年)の創業で、赤穂浪士の討ち入りがあった10年後になります。東京で最も古い人形の専門店です。今年で創業305年を迎えました。

1927年(昭和2年)の日米親善人形交流は、日本の人形業界にとっても、吉徳にとっても、今なお忘れがたい大きな出来事です。

1923年(大正12年)の関東大震災の苦難の後の1926年(大正15年)の12月25日に、大正天皇が崩御されました。国民は、喪に服して、歌舞音曲は一切ご停止、また祭礼も禁止となりました。雛人形問屋は、年内にはすでに次の年の販売の仕入れを終えており、年が明ければ、いざ雛人形の売出しが始まる最も大切な時に、「雛祭り」という「祭り」が禁止になったのです。さあどうしたらいいか。当時、東京雛人形卸商組合の副組合長を務めていた吉徳の10代目の山田徳兵衛が、高齢の組合長に代わって、時の文部大臣(岡田良平氏)に面会して、何とか「雛祭りは民間行事であって、祭りにあらず」というお墨付きを頂きました。しかし、マスコミなどにもこれを訴えましたが、効果のあがらない日々が続いていたようです。

そこへ、アメリカからシドニー・L・ギューリック博士のメッセージが届いてきて、「日米親善のために、文部省を通じて、友情の人形を日本の雛祭りに参加させて下さい」と言ってきたのです。早速、文部省から人形の手配や雛祭りの用意の依頼がきました。急いで

何かの基準を設けなければならないということで、吉徳が考案した七段飾りなどの「基準飾り」がこうして全国に広まっていきました。

結果的には、昭和2年のお雛様の販売は、人形業界空前の売れ行きとなりました。全国各地で、青い目の人形を迎えて雛祭りが行われました。そして、全国津々浦々に雛祭りが盛んになったのも、この1927年（昭和2年）の、いわば官民一体の一大イベントが、各地に根付いたことによるものと思います。

青い目の人形の返礼として、贈られた答礼人形は、吉徳10代目の山田徳兵衛が、企画、製作の指揮に当たりました。そして、1974年（昭和49年）の答礼人形里帰り第1号のメリーランド州ボルティモア美術館所蔵の「ミス広島」を手始めに、近年の答礼人形たちの里帰りに際しては、先代の心を受け継ぐ11代目の山田徳兵衛が、その大多数の修復の監修を務めました。

現在は、亡き11代目に代わって、現社長の12代目の山田徳兵衛が、その心を受け継ぎ、答礼人形の修復に積極的に参加しています。吉徳の永い歴史の中で、祖父から孫の3代にわたり、当主が日米親善人形の答礼人形に関わり続けてきたことは、人形が結ぶ何か不思議な縁であると思います。

私は、1972年（昭和47年）に大学卒業後、東京・浅草橋にある吉徳に入社して、今年で44年目になります。入社後すぐに、吉徳の本店である浅草橋本店で、日本人形や節句人形の販売を中心に、宮内庁や外務省など特別な業務を担当してきました。特に、浅草橋の本店長、そして社長室の勤務の時から、11代目の山田徳兵衛の下で、答礼人形の点検及び修復を担当することになり、数多くの答礼人形たちのお世話をして現在に至ります。

そして、今まで答礼人形たちの修復を進んで引き受けてきた関係上、彼女たちの美しさと品位の素晴らしさの虜になった一人です。

答礼人形と私の関わりは、1983年（昭和58年）のワシントンDCスミソニアン博物館所蔵のミス大日本「倭日出子」の里帰りから始まり、答礼人形の修復を担当して、今年のみズリー州カンザスシティ博物館所蔵の「ミス静岡」、そして個人所蔵の「ミス群馬」が41人目となります。近年は、日本とアメリカの各地の答礼人形の里帰り行事に積極的に参加して、彼女たちの着物の着付け直しもしてい

ます。

答礼人形は、いずれも清らかな少女の美しさと、凛とした気品を併せ持つ素晴らしい人形です。それは、当時の名工たちの人形技術の粋を一身に集めた第1級品の人形であるからです。写実的な目、鼻、耳、そして愛らしい口をそなえた顔立ちのあどけなさは最高です。手と足の指の形状は、指の骨の位置の皺から、指全体、指先のふくらみ、爪、爪半月まで、実に精巧につくりだされています。手のひらには、生命線、頭脳線、そして感情線まではっきりと溝を刻んでいます。そのあまりの可愛さに、アメリカ到着後、握手の連続で、彼女の手が黒光りするほど汚れたというのも納得できます。また、羽二重の足袋を脱がせると、足の裏には土踏まずまで作り出されています。

答礼人形の工法には、各部位ごとに様々な工夫が凝らされています。大きさは、2尺7寸、82cmで、三つ折れ人形です。腰と大腿部（もも）、そして膝と脛にあたる部分が、それぞれ金属の蝶番で固定してあり、椅子に座るだけでなく、畳に正座ができる構造になっています。ふくらはぎのふくらみのカーブがあたる太ももの裏側は、掘り込んであります。足先にも工夫が凝らされています。正座した際に、足首から先が外側に向くように、足首に固定された釘状の竹の軸が、脚部に埋め込まれた竹筒の中で回転します。竹筒の最上部は刻まれていて、真後ろに足が回転しないようにストッパーの役割を果たしています。また「泣き子」と呼ばれるフイゴ笛を胴に仕込んだ人形で、2枚の木の板を上部で合わせ、和紙と布で末広型の袋状にフイゴを作り、笛をとりつけた竹筒を通します。胴を押すとフイゴの中の空気が竹筒を通る時、笛を鳴らします。

答礼人形の修復の難しさは、誕生した1927年（昭和2年）の当時の初々しさと、年月のもたらす古風さとを、共にいかさなければならないところにあります。重症患者の答礼人形の場合は、各部位、すなわち頭、手、足、胸、腰を分解して、それぞれの治療後に接合します。治療の多くは、汚れを落とした後に、貝の粉を膠で溶いた「胡粉」を繰り返し塗ります。特に、乾燥によるひび割れや亀裂が多く、桐の粉を正麩糊で混ぜた「桐塑」を補填して、下地を養生した後に、胡粉を繰り返し

塗ります。また、三つ折れの接合部分の痛みも多く診られ、治療を必要としています。破損部分や欠落部分の整形手術も少なくありません。私は、彼女たちに深く心を寄せて、細心の注意を払いながら治療に努力しています。

現在、答礼人形 58 体のうち、47 体の存在が確認されています。「ミス愛知」は 2010 年（平成 22 年）に、ロードアイランド州の個人のお宅で、46 番目に確認されました。彼女は、西洋人形のカツラをかぶり、花柄のワンピースを着ていて、答礼人形本来のものは、下着のコンビネーションと羽二重の足袋だけで、着物や帯は失われていました。長い間、行方不明の人形が「ミス愛知」として、新調した着物を着て、日本髪をそなえ、再び答礼人形として、日米親善人形交流 90 年の記念すべき年に、愛知に里帰りすることは、大変意義深いことです。また「ミス愛知」は、後頭部に記された銘により、後に人間国宝となった平田郷陽作の人形であることがわかりました。本年、里帰りした「ミス静岡」も平田郷陽の作ですが、生き人形の技法を取り入れた写実的な顔立ちが、他の答礼人形にはない大きな魅力になっています。

現存する 47 体のうち、日本への里帰りを果たした答礼人形は 41 体です。残る 6 体の彼女たちの痛み具合を心配しながら、日本への里帰りを果たしてあげたいとおもいます。

一方、1927 年（昭和 2 年）の青い目の人形は、337 体が確認されています。愛知県内では、10 体の青い目の人形が確認されています。日本では、全国友情人形の会、そして各地での青い目の人形を中心とする活動が活発に行われています。定期的に行われている幼稚園や小学校での青い目の人形を囲んでの「ひなまつり」、青い目の人形の劇や紙芝居や絵本の制作、そして、市民参加のミュージカルまで、子どもから市民の皆さんの関心の中で継続しています。近年では、新しい「青い目の人形」が、友好のメッセージを携えて、この日米親善人形交流に活躍しています。

ギュリック 3 世夫妻（1936～、1941～）は、親善人形の提唱者の祖父シドニー・L・ギュリック博士（1860～1945）の遺志を引き継ぎ、新しい友情人形として、1986 年（昭和 61 年）から 30 年の長い間、「新青い目の人

形」を日本各地の幼稚園や小学校などに贈り続けてこられました。お人形の数は、260 体にもなります。私財を投じて、個人として贈り続けることは、お人形代、洋服代、そして郵送料など経済的にも大変なことです。

今年 5 月 26 日に、お人形を贈り続けるきっかけとなった、京都市の高倉小学校を訪問されました。708 人の生徒さんと大勢の小学校の関係者の皆さんによる、温かい心のこもった歓迎会に大変に感激されていました。

また、その夕べに「新青い目の人形寄贈 30 周年記念式典」を開催して、ご来賓と友情人形の関係者の参加の中、ご夫妻に心からの感謝の気持ちをお伝えしました。特に、お人形のために、お手製の旅行かばん、着替えの洋服から小物まで、心をこめて作り続けてこられた奥様のフランシスさんの細やかな心遣いにはお礼の言葉もありません。いつも、お二人の変わらない素晴らしい笑顔と、常に前に向かって進む行動力には驚かされます。ご夫妻の熱意に応えたく、これからも長く、人形交流の精神を伝え続けていきたいと思ひます。

ギュリック 3 世ご夫妻は、来年の愛知訪問を楽しみにされています。

私の答礼人形研究のバイブルである「人形大使」の著者の高岡美知子先生（1932～）のお言葉をお借りすると、「人形交流は、人間交流」であり、また「人形は語る。伝えるのは人間」になります。

私は、この「人形大使」の本の中で、今まで研究したことを書き加えています。このように私にとっては大切な本です。

89 年前、当時、急増する日本人移民への反感から排日気運が高まり、それを憂えたシドニー・L・ギュリック博士の提唱で、子どもを中心に 270 万人ものアメリカ人が、親善人形の青い目の人形 12,739 体を贈り、その返礼として、渋沢栄一翁の尽力により、日本の子どもたち 260 万人の募金で、答礼人形 58 体がアメリカに贈られました。日米両国で、あわせて 530 万人もの人々が関わったこの民間外交は、非常に大規模で珍しい出来事でした。

1929 年（昭和 4 年）、日米人形交流の橋渡しをしたニューヨークの「世界児童親善協会」が編纂した、シドニー・L・ギュリック博士が書いた「友情の人形 Dolls of

Friendship」があります。この本には、日米親善人形交流の企画の全貌が詳細に書かれています。「青い目の人形」の来日と、「答礼人形」の渡米の、いわば童心が結ぶ日米友好外交の顛末を詳しく伝えたアメリカ側の貴重な記録文献でもあります。この本は、1997年（平成9年）にシドニー・L・ギューリック3世により第二版として復刻出版されました。

「平和を望む者は、まず子供たちの冒険の人生の物語である」という書き出しで始まります。そして、アメリカ側の「青い目の人形」の贈り主の並々ならぬ心尽くしや「答礼人形」たちが、アメリカ各地で友愛の心に包まれて、大歓迎された事例が綴られています。全米をあげて、人形の旅行局を設立し、青い目の人形それぞれに、旅行切符、旅券（パスポート）を携えて、アメリカの子ども達の身代わり役を務めて、大勢の人形たちは日本にやってきたのです。

今も、この人形交流が多くの人々に継承されています。しかし、知る人ぞ知るといえますか、皆が知っているわけではありません。これからも、日米両国ともに、この人形交流の理解をして頂くためにも「友情人形の交流展」の開催、友情人形の関連の行事などを通して、「青い目の人形」と「答礼人形」が話題になり、そして、未知の人々が、このお人形を仲介して、お互いの絆を深め、国を超えて日米友好、世界平和に結ばれることを多くの人が望んでいます。

日本、アメリカ、両国の人形大使たちが、永遠につぶらな瞳で友好メッセージ送り続け、彼女達は語りたがっています。それを語り伝えていくのは私たち一人一人です。

近年は、アメリカ国内でも、各地で答礼人形の展示や地域の答礼人形の同窓会の合同展示など、シンポジウムも積極的に開催されています。アメリカでも、次第に答礼人形への認識も広まり、人形交流にとっても感動して、関心を高めています。

昨年12月に里帰りした「ミス岩手」は、アラバマ州バーミングハムの公立図書館と、婦人会の皆様のご厚意によるものでした。震災復興にある岩手県民へのお見舞いと励ましの人形大使として、アメリカ側から、クリスマスプレゼントとして、日本に里帰りさせて頂きました。今年の春、無事に彼女は大役を果たし、バーミングハムの桜祭

りで「お帰りなさい!ミス岩手さん」の慰労の歓迎会を開催して頂きました。

最後に、日本に贈られてきた「青い目の人形」そして「新青い目の人形」を愛し、89年前にアメリカに渡った、まだ見ぬ答礼人形を探しながら、ゆっくりと、人形大使を訪ねて、身だしなみを整えてあげたいと思います。ご清聴ありがとうございます。

★社会奉仕委員会事業のご案内

来る12月3日はロータリー財団補助金を使った本年度の社会奉仕委員会事業を行います。会場は、名古屋の中京大学で開催します。会員の皆様のご参加をお願いします。

人形交流90周年に向けて
青い目の人形と答礼人形の歴史
シンポジウム

昭和2年の日米関係が悲化の一途を辿る中、心を痛めていた米国人兵曹道平・ユージック(日本に長く滞在し、同僚と大・中・高層大でもあった)は、日米両国の子供達が互いの国のことをもっと知り合い、愛着し合う事が両国の関係改善に役立つと考え、この人形には各県や大都市の名前が付けられており、それが「愛知」・「ミス名古屋」である。今回90周年を記念してその歴史を「青い目の人形」と題し、92年以降の歴史を「新青い目の人形」と題し、国内4地域で展示しようとするのである。

2017年の懇話会に先立ち今回日本人形交流の歴史を考え、更に本年実施されたミス静岡の展覧会・新青い目の人形30周年記念行事の報告と更に実施済みの岐阜・三重の里帰り展の報告を含めたシンポジウムを開催する。

主催 答礼人形を里帰りさせる会
後援 名古屋教育委員会・中京大学・中日新聞社・豊川宝殿ロータリークラブ

日時 2016年12月3日(土) 14:00~16:00 会場 中京大学0603教室 入場無料
(名古屋市北区下宮町4-1-1 中京大学0603教室)

- オープニング ----- 青い目の人形新作ミュージカルターマソング
【親と子のあじろの社会劇団・愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団】
- 日米人形交流へのメッセージ ----- 米国旗手
- 基調講演 マスコミから見た日米人形交流 ----- 木村昭彦氏
- 新青い目の人形30周年記念行事について ----- 人形の吉徳 青木勝氏
- ミス岐阜・ミス三重里帰り展について(第1回シンポジウム報告) ----- 近藤副会長

★ニコニコボックス

- 高桑 耐会員 小野会頭、笠原副会頭
半田副会頭ご就任お祝い
- 山本章吾会員 合同コンペで優勝して
- 土井昌司会員 誕生日を祝って頂き
- 大島嗣雄会員 結婚記念日を祝って頂き

会報担当：中村嘉輝会員・中西弘徳会員